

ペルテス病の保存治療

座長：和田 郁雄・西須 孝

ペルテス病の保存治療の治療成績に関する演題が3題、体組成への影響に関する演題が1題、画像評価に関する演題が1題発表された。米国およびノルウェーでそれぞれ行われた大規模前向き多施設調査においては保存治療の有効性が疑問視され、米国の調査では重症例に対する手術治療の限界も示されたが、これらの調査とは異なる方法の保存治療が本邦において行われてきた。5演題に共通しているのは完全免荷を行ったことである。諸外国では実現の難しいこのような治療法も、本邦における手厚い医療制度の元では有力な選択肢のひとつとなっている。

高橋祐子先生の演題は宮城県において伝統的に行われてきた長期入院療法で、その優れた最終治療成績は国際的にも評価されるべきものと思われた。藤田裕樹先生の演題は免荷保存療法の全身への影響を調べたもので、免荷保存療法の是非を明らかにしていくための土台になる研究と思われた。中村直行先生の演題は Okano らが報告した Roundness index を用いて骨頭の球形度を定量化して治療経過を評価したもので、どのような症例を保存療法の対象とすべきか考えていく上で将来性のある研究と思われた。天野敏夫先生は short A-cast を用いたユニークな治療方法について発表された。米国では重症例に対する手術治療の限界が示されて以降、一部の小児病院では A-cast による治療が見直されつつある。この流れが正しいものかどうかはまだわからないが、幅広い選択肢から適切な治療法を見つけていくためにも、本邦における学会でこのような治療法を目にすることができたのは幸いであった。細川元男先生は new pogo-stick 装具の治療成績について示された。免荷保存療法は、完成されたものとして考えるのではなく、様々な工夫を加えて発展させていくべきものであると感じた。

すべての演題に共通した免荷保存療法の是非については、同じ重症度の患者を対象とした手術治療との比較研究を行うことによって明らかにすべきものであるが、その実現は難しい。施設ごとの治療指針を尊重したノルウェーの前向き多施設調査のスタイルをとれば、本邦における保存治療の優秀性を海外へ発信していくことができるのではないかと思われた。

(文責：西須 孝)